

井上円了と福沢諭吉－その生涯と業績－

The Lives and Achievements of Enryo Inoue and Yukichi Fukuzawa

堀 雅 通

Masamichi HORI

[目次]

1. はじめに
2. 円了、福沢の研究体制
3. 教育者・思想家・著述家としての活動
4. 生まれと私生活
5. むすび

1. はじめに

かつて慶應義塾（大学）で学び、東洋大学に勤務し、両大学の創設者・井上円了（以下「円了」）と福沢諭吉（以下「福沢」）を知るに至って気付いたことがある。両人の生涯と業績、そして人柄がよく似ていることである。まず建学精神が似る。東洋は「独立自活」、慶應は「独立自尊」一。

福沢より二回り若かった円了は早くから福沢の著書に親しみ、学問に対する福沢の姿勢に感化された。学校経営でも福沢を尊敬し、また文筆を以って衆に訴える福沢の行動を範とした¹⁾。そのような円了と福沢には多くの類似点・共通点がある（むろん相違点もある）。

兩人とも若くして「学問」で身を立てることを決意、生涯、官途に就くことなく、在野で活動した。虚飾と権威を嫌い²⁾、ざっくばらんな性格だった。自由を愛し、平等をモットーに、福沢は平民学者、円了は農民学者をもって任じた。古い考え、しきたりを排し、科学的・合理的な思考を身につけ、啓蒙に努めた。一方で自国の文化・伝統を重んじ、西洋かぶれを排した（真正の）ナショナリストだった。

円了も福沢も弁舌に長け、アグレッシブな行動様式で知られる。大学をはじめ、幾つかの組織の設立に関わり、その運営に優れた実務能力を発揮した。また、いずれも、文人ながら数理・統計的思考に優れていた³⁾。

本研究は、以上のような井上円了と福沢諭吉の生涯と業績、そして人柄を比較することで新たな井上円了像に迫るものとする⁴⁾。

2. 円了、福沢の研究体制

我が国の私学の創設母体は、私立大学の創立期を見ると、宗教団体によるもの、皇室や政財界に

よるもの、専門家の集団によるものが多く、個人によるものは極めて少ない。その中で大隈重信の早稲田大学、福沢諭吉の慶應義塾大学、津田梅子の津田塾大学、そして井上円了の東洋大学は個人立による私学の典型である。そのような個人が創設した大学においては創設者の存在は非常に大きく、当該創設者の研究・資料収集等が、それぞれの大学組織によって鋭意行われている。

ただ井上円了に関する学術的な研究は当初あまり行われてこなかったという⁵⁾。資料研究、思想研究いずれにおいても大正8年(1919)の没後直後の域をほとんど出なかった。そうした中、学術的・客観的な立場から東洋大学が本格的な井上円了研究に取り組むようになったのは昭和53年(1978)のことである。以来40年以上に渡り、研究の基礎が形成され、創設者としての再評価が行われるようになった。ちなみに平成30年(2018)年は、井上円了没後100年に当たり、同年6月6日、菩提寺の蓮華寺(中野区)において100回忌法要が営まれた。

現在、井上円了の研究は東洋大学井上円了研究センターによって行われている⁶⁾。同センターは井上円了の研究をより深めるため平成2(1990)年4月に創設された井上円了記念学術センターを平成26年(2014)に改組したものである。平成24年(2012)には国際井上円了学会が設立され、国際的な視点から井上円了の研究が行われている。

一方、福沢諭吉の研究は慶應義塾福沢研究センターによって行われている。同センターは福沢諭吉やその門下生、(慶應)義塾及びその出身者・関係者の事績について資料収集・調査研究を行っている。福沢や義塾を視野に置きつつ近代日本の研究も行っている。この目的達成のため、同センターは塾内の諸学部、一貫教育校の枠を越えた全塾的な共同研究機関に位置付けられ、義塾外の研究者との連携も図りながら活動が続けられている。

慶應義塾によって早くから福沢諭吉の研究が組織的・体系的に行なわれてきたのに対し、東洋大学における井上円了研究は慶應義塾に比較したなら日が浅い。福沢にはすでに全集21巻・別巻1があるが、円了には選集25巻はあるものの全集は(まだ)ない⁷⁾。ただ既述した通り、近年、井上円了の研究体制・組織は鋭意整備されつつあり、優れた研究者も輩出、着々とその成果を上げている。

3. 教育者・思想家・著述家としての活動

円了も福沢も教育者・思想家として名を成すがいずれも人々に西洋の諸事情・世界を知ってもらうことで民衆の知識の向上を図ろうとした。それは後年、明日の人材を育てる教育(事業)、とりわけ社会教育、生涯教育へと向かうことになる。また二人とも旺盛な著述活動を展開し、学校教育・社会教育に心血を注いだ。

円了は西洋哲学との出会いから旧態依然たる仏教界に疑念を抱き、「哲学」の伝道を志した。西洋哲学を積極的に取り入れながら仏教思想の中に東洋哲学を発見、すべての日本人に「哲学」を伝えることを決意した。そのためにまず哲学館を創設、これを哲学館大学、東洋大学へと発展させた。しかしながら、明治37年(1904)の「哲学館事件」を機に学校経営からは身を引き、以来、一人の社会教育者として「修身教会運動」と称する伝道の旅に出た。修身教会運動は国民の倫理・道徳に関する生涯学習運動で欧米の「言論の自由、人格の尊重、社会道徳の発達」をモデルとしていた。

「全国巡回講演（巡講）」がその手段となった。巡講では都会よりも地方に足を運び、「哲学」を学ぶ意義を訴えた⁸⁾。

一方、福沢は幕末に三度渡航し、欧米諸国の文物・制度に接することで、また積極的な洋書の読解を通してわが国の進むべき方向性を捉え、その方途を広く国民に示した。すなわち福沢は西洋を実地に見ることで活眼、我が国と欧米諸国とを比較し、日本に何が欠けているかを論じた。それは例えば「有形に於て数理学と、無形に於て独立心」だった。数理学とは（文字通り）数と理とを基礎とする学問で実証的な科学（サイエンス）といってよい⁹⁾。独立心とはいうまでもなく依頼心を退け厳然たる自己を確立する気力の義にほかならない。福沢は創立した慶應義塾でもこの二つを教育の基本方針とした。そのような福沢は上野の彰義隊の戦乱の渦中にあっても端然として学問に勤しみ若者を教育した。「紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」の心境だった。

円了、福沢とも漢学から洋学への転身が科学的・合理的な思考を身に付ける機縁となり、西洋文明、西洋社会への活眼を開かせた。それは同時に東西両文明との対峙、自由と平等、真理の追求でもあった。方便として福沢は「実学」を、円了は「哲学」を学問の柱に据えた。

啓蒙思想家として名を馳せた二人だが、その生涯は社会教育者としての歩みであった。福沢がもっぱら著述によって啓蒙活動を展開したのに対し、円了は巡講という、いわば足による啓蒙に努めた。自らの足で直接民衆に語りかけた。

いうまでもなく円了、福沢とも旺盛な著述活動で知られる¹⁰⁾。いずれも若くして「学問」に目覚め、漢学を学び、その素養がその後の著述活動の基盤となっている。両人の著述活動の基礎が漢学にあったことに留意したい。漱石、鷗外にも言えることだが、同時代人の彼らの漢学の素養は驚くほど深かった。「実学」を重視した福沢も儒学を虚学と称し軽蔑していたが、漢学の素養は深かった。

万延元年（1860）、25歳のとき軍艦咸臨丸に乗り組んで渡米した福沢は、帰朝後、幕府の翻訳方に勤める一方、最初の訳書『増訂華英通語』を発刊した。31歳の慶応2年（1866）、『西洋事情』初編三巻、37歳の明治5年（1872）、『学問のすすめ』初編、明治8年（1875）、『文明論之概略』、明治12年（1879）、『民情一新』、『国会論』、明治30年（1897）、『福翁百話』、明治32年（1899）、『福翁自伝』、『女大学評論・新女大学』、明治34年（1901）、『ていちゆう丁丑公論・やせがまん瘦我慢の説』といったように次々と著作を刊行していった。『西洋事情』、『学問のすすめ』、『文明論之概略』は代表3部作として知られる。

福沢の論ずるところは全て英学を通じて得た新知識に基づくものでもっぱらわが国の人々が新たな時代に処すべき方途を説いたものであるが、その影響力は極めて大きかった。ちなみに福沢は明治2年（1869）、34歳のとき「福沢屋諭吉」の名で書物問屋組合に加入し、出版業にも乗り出した。幕府官吏として翻訳を手掛けたこともあって出版事業に通じていた。円了も哲学書院を設立して自著を出版している。

教育者としての円了と福沢の活動拠点はいずれも創設した私学に置かれた。円了は東京大学在学中、学問としての「哲学」の重要性を認識し、明治20年（1887）、哲学を専修とする哲学館を創設、「余資なく優暇なき者」にも「哲学」を学ぶ機会を与えようとした。通信教育も先駆的に手掛けた。そのために発行した『哲学館講義録』は地方で学ぶ人々に学問の便宜を図るものとなった。このように円了は地方に目を向けた教育活動を展開していった。

一方、福沢は23歳のとき蘭学の家塾を開いた。慶応4年(=明治元年)(1868)4月、33歳のとき、この家塾を新銭座に移し時の年号にちなんで塾名を「慶應義塾」と定めた。同年、幕臣を辞して帰農、新政府からはしばしば出仕を命ぜられたが固辞した。明治4年(1871)3月、慶應義塾を新銭座から(現在の)三田に移している。

明治23年(1890)、慶應義塾に大学部を設け文学・理財・法律の3科を置いた。明治25年(1892)、北里柴三郎を助けて伝染病研究所の設立に尽力した。明治33年(1900)、多年にわたる著訳教育の功により皇室から金五万円を下賜され、これを直ちに慶應義塾基本金に寄付した。なお慶應義塾の運営において福沢は授業料を徴収し金銭(=利益)の追求を正当化した。円了も寄付金等によって事業資金を確保した。二人とも金銭や細事に関わらないことを誇りとした当時の儒教的な意識をあえて否定した¹¹⁾。

私学の運営をめぐるのは円了も福沢も時の政府の妨害を受けた。円了については「哲学館事件」がある。明治35年(1901)12月13日、文部省が哲学館の中等教員無試験検定の特典を剥奪した。海外視察旅行中の円了はこれをロンドンで知る。哲学館事件は大きな社会的事件となり「大雅量」の円了もさすがに神経を病み庭前で卒倒しかけた。哲学館事件は円了に大学経営からの引退を決意させる契機となった。哲学館事件は福沢が亡くなった翌年に起きているが、仮に福沢が存命中だったらどのような議論を(福沢が)展開したか興味あるところである。

明治14年(1881)10月、政変が起こり福沢は政府の嫌疑を受けた。その結果、予定していた新聞(『時事新報』)の発行が中止となった。門下生にも圧迫が及んだ。ふってわいた災難、思わぬとばかりともいうべき事変ではあったが福沢に少なからぬ影響を与えた。

慶應義塾大学は文学に加え理財、法律と社会科学の分野、いわば「実学」に重点を置き、さらに医学部、工学部と理系の学部も創設していった。そして実業界で活躍する多くの人材を輩出していく。このように当初から理系をも視野に捉えていた慶應義塾大学に対して東洋大学はもっぱら人文科学系、それも一般にはなじみの薄い「哲学」を柱に据えた教育を基本とした。卒業生には教員や僧侶が多かった。社会科学系の学部ができたのは戦後まもなくのことで自然科学系の学部の設置はさらに遅れた。仮に東洋大学が慶應義塾大学と同じように医学部をもっていたならかなり変わっていただろう。ともあれ「哲学」重視と「実学」重視の「相違」が現在の両大学の「差異」に繋がっているものと考え(「相違」は要因、「差異」は結果)。ちなみに福沢の唱えた「実学」は科学(サイエンス)と同義といってよい。

4. 生まれと私生活¹²⁾

以上のように思想家・教育者、そして著述家として多くの業績を残した円了と福沢だが、二人の生まれと私生活はどのようなものであったろうか。ここで改めて二人の生涯を比較しながら追ってみる。

4.1 家督を弟に譲る－哲学との出会いが転機

円了は、安政5年(1858)2月4日(新暦3月18日)、越後国長岡藩西組浦村(現在の新潟県長

岡市浦)にある真宗大谷派慈光寺の長男として生れた。福沢より二回り(24歳)若い。寺の住職の長男ということで経や作法を学ぶ伝統的な宗門教育を受けて育った。

幼いころから円了は世人とその好悪を異にしていたという。同郷の子供と遊ぶこともなく、「楽しみ」といえば、野山、山河に入って時を過ごす。換言すれば「ものを考える」少年だった。

円了は自宅の慈光寺内に塾が開設されると近隣の子供たちとともに午前は漢学、午後は英語の初歩を学んだ。当時、寺で英語を教えるのは極めて稀なことで、父・円悟の教育熱が窺われる。

明治元年(1868)、10歳のとき蘭方医・石黒忠^{ただのり}恵の塾に通い漢学や算術を学んだ。勉強熱心な子供で、大雪で誰も来なかった日、ただ一人通ってきたというエピソードがある。円了は石黒が江戸で身につけた「洋風」にあこがれた。明治2年(1869)からは長岡藩儒者・木村^{どんそう}鈍叟に付いて多くの漢籍を学んでいる。

明治7年(1874)、16歳のとき新潟学校第一分校(長岡洋学校)に入学、洋学に転じ英書により欧米の歴史を学んだ。また当時ベストセラーの福沢の『西洋事情』や『学問のすすめ』、中村正直の『西国立志編』などに親しんだ。

円了にとって転機となったのは慈光寺の本山・東本願寺(京都)から上洛せよとの命令があり、京都で学びさらに東京に出たことである。明治14年(1881)、東京大学文学部哲学科に入学した。大学では円了は学力のみならず行動力でも頭角を現し、一段抜きん出た存在となった。そのような円了の生涯を決定付け、転機となったのが大学時代における「哲学」との出会いだった。

なお円了は長男ゆえ寺を継ぐことが定められていたが、後年父を説得し家を出た。寺は次男・円成が継いでいる。そんな円了の母・イクは「慈光寺がつぶれても円了の事業を支える」と言い続けた。円了にとってイクは最大の理解者だった。

4.2 次男ながら家督を継ぐ－英学との出会いが転機

福沢は、天保5年(1834)12月12日(新暦1835年1月10日)、大坂の中津藩蔵屋敷に下級武士の次男として生まれた(現在、その地は大阪大学医学部構内にあたり記念碑が建っている)。1歳のとき父・百助が死去したため母子6人共々藩地・中津に帰ったことから幼少期は中津(大分県)で過ごしている。いわゆる母子家庭だったが、気骨ある母順がいた。また性格の異なる兄三之助がいた。21歳のとき兄が亡くなったため、次男ながら福沢家の家督を継いだ(ちなみに円了は長男ながら家督を弟に譲っている)。

福沢の父・百助は幼少時から秀才の誉れ高く、蔵屋敷の仕事をしながら儒者としても知られていた。兄もまた儒者だった。一方、円了の父・円悟も自らの寺を塾として開放し、近隣の子供たちに漢学と英語を教える場を提供した。このように円了も福沢も幼少時「学問」に理解ある環境で育っている。二人とも頭脳明晰、記憶力抜群だった。

福沢は下級武士の子として生まれたため幼少時より武家社会の身分差別の苦々しさを身をもって体験している。それゆえ「門閥制度は親の敵^{かたき}」と身分制度に強い敵愾心を抱き、その反動から身分制度からの自由と平等を強く訴えた。これに対し円了は地方の村とはいえ村民から敬われる、一目置かれる寺の長男ということで身分意識という点ではおおらかな環境で育っている。

福沢は遅ればせながら12歳の頃から漢学を学んだがたちまち上達した。19歳のとき兄の勧めにより蘭学を志し長崎に出た。21歳の年、長崎から大坂に出て緒方洪庵の適々齋塾(適塾)に入門

した。当初は大坂蔵屋敷在勤中の兄のもとから通学していたがまもなく適塾の内塾生（寄宿生）として住み込み、安政4年（1857）、塾長となった。安政5年（1858）、23歳のとき藩命により江戸に出た。

江戸ではほどなく藩主・奥平家中屋敷内に蘭学の家塾を開いた。これが慶應義塾の起源となる。安政6年（1859）、24歳のとき、開港の横浜を見物し、これを機に蘭学から英学に転向する（決意をした）。これが福沢の転機となった。英語は独力でこれを修めている。

4.3 三度の渡航体験と国内旅行

円了、福沢とも三度の渡航体験がある。二人とも海外のみならず国内も数多く旅行している。円了の巡講はつとに有名だが福沢も好んで旅に出た。

円了は当時としては異例ともいべき生涯に3回の世界一周旅行を行っている。第1回の海外視察旅行は東回りで世界を一周、帰朝後『欧米各国政教日記』を著わした。2回目は西回りで世界一周、『西航日録』を刊行した。第3回は南半球（オーストラリア、ホーン岬など）へ、さらに北半球へ向かいノールカップ岬を訪ね日本人としてはおそらく初めて白夜を体験している。その後再び南半球へ向かい南米（ブラジル、コロンビアなど）を訪問、この旅行で赤道を4回通過、旅行後、『南半球五万哩（マイル）』を著わした。

国内は巡講で全国を回った¹³⁾。のみならず韓国、朝鮮、台湾まで足を延ばしている。こうした巡講の旅行記が「館主巡回日記」（前期巡講）と『南船北馬集』（後期巡講）である。これより先、円了は東本願寺の命により郷里から上洛する際の旅行記「西京紀行」を皮切りに、学生（東京大学予備門・東京大学）時代の自筆の旅行記として漢文訓読体の『漫遊記』を遺している¹⁴⁾。

福沢は万延元年（1860）1月、25歳のとき軍艦咸臨丸に乗り込み渡米。帰朝後幕府の翻訳方に雇われた。2回目は、文久2年（1862）1月、27歳のとき遣欧使節随員として渡欧した。フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル等の諸国を巡遊し、12月に帰朝した。3回目は慶応3年（1867）1月、32歳のとき幕府の軍艦受取委員随員として再渡米、東部諸州の諸都市を見て6月帰朝した。このとき多くの英書を買っている。

国内旅行では41歳のとき長男・次男を伴い京阪地方を旅行。51歳のとき全国漫遊を思い立ち、まず東海道旅行を企てた。54歳のとき妻子を伴い京阪地方に遊んだ。57歳のとき京阪・山陽地方に旅行。59歳、長男・次男と中津に赴いた。60歳のとき妻を伴い広島に旅行。61歳のとき妻子とともに伊勢参宮、信越・上州にも行った。62歳のときも家族で京阪・山陽方面に遊んでいる。

福沢は旅行に際し常に妻子を同伴した。福沢の旅行は学校視察を目的とすることもあったがおおかた家族旅行だった。円了も家族を大切にしたが巡講に妻子を伴うことはなかった。

4.4 病気と健康

円了、福沢ともに概して丈夫な体躯の持ち主だったがいずれも大病の経験がある。円了は明治18年（1885）12月から明治20年（1887）10月の間に痔疾、咽喉カタル、血痰、咯血などの症状（結核の疑い）があったという。昼夜を問わない研究生活を送っていたための病気（「難治症」）で長期の療養を強いられた。そのような中にあっても著述活動は続けられ、初期の主要な著作はこのときなされている。なお病気のため大学院への進学を辞退したが、上述以外は生涯至って健康だった。

それゆえ巡講も精力的にこなしていった。ちなみに温泉好きの円了は巡講先でしばしば温泉浴を楽しんでいる。疲労回復のため温泉療養に出掛けることもあった。そのような円了は大正8年(1919)6月5日、大連で講演中に脳溢血で倒れ、翌日午前2時40分死去した。享年61歳。

福沢は当時の日本人にしては大柄な人だった(身長173cm)。船にも強かった。咸臨丸で渡米した際、船酔いでダウンし艦長の職を果たさなかった勝海舟を軽蔑した。円了も船酔いの経験は(ほとんど)なかった。

福沢は二度ほど生死の境をさまよった。5歳のとき軽い天然痘にかかった。21歳のとき腸チフスを患ったが1ヶ月程で全快。35歳のとき、発疹チフスとなり、一時人事不省に陥った。63歳のとき最初の脳出血となった。何とか回復したが3年後の明治34年(1901)、再び脳出血となり、2月3日午後10時50分、死去した。享年66歳。

4.5 酒と女性

円了、福沢とも酒と煙草を嗜んだ。福沢は朝飲み、昼飲み、晩に飲むといった酒癖で酒に目がなかった。福沢最大の弱点が酒であることはあまり知られていないが『福翁自伝』には自身の酒癖をあからさまに語っている。福沢ほどではないが円了も酒好きだった。「朝はいや、昼は少々、晩はたっぷり」といった感じで一時禁酒を誓いビールを飲んでいて(ビールは酒にあらず)。晩年は健康に気を使い日本酒とウイスキーを水で薄めて飲んだ。

円了は大学卒業の翌年、明治19年(1886)、28歳のとき金沢藩医吉田淳一郎の娘・敬^{けい}と結婚した。福沢は文久2年(1862)、26歳のとき中津藩士土岐太郎八の子女錦^{ときたろはち きん}と結婚、生涯錦を連れ添った。福沢は家族思いの愛妻家で一家団欒を大切にしていた。晩年の全国漫遊にも妻子を伴った。円了も家庭に優しくしたが巡講で忙しくほとんど家にいなかった。子供たちもたまたま父がいると変な感じがしたと回想している。

円了も福沢も女性に対する関心が薄かった¹⁵⁾。兩人とも男女関係には極めて潔癖で生涯妻以外の女性と関係することはなかった。

4.6 ユニークな建造物を遺す－哲学堂(公園)と三田演説館

円了、福沢ともユニークな建造物を遺している。円了は哲学堂(公園)、福沢は三田演説館である。

明治39年(1906)、大学経営から「退隠」(引退)した円了はすでに学校移転用地として購入していた土地(中野区)を個人で買い取り四聖(釈迦・孔子・ソクラテス・カント)を祀る哲学堂の本格的な建設・整備に着手した¹⁶⁾。哲学堂は円了の修身教会運動の本山であるだけでなく精神修養の場、公園でもあった。「哲学堂公園」は、後年、東京都に寄付され、現在、ユニークな公園、散策・憩いの場として親しまれている。

福沢によって建設された慶應義塾の三田演説館(国重要文化財)は我が国最初の演説会堂である。開館は明治8年(1875)5月1日、構えは木造かわらぶき、なまこ壁で日本独特の手法が用いられているが米国から取り寄せた図面をもとに造られた明治初期の洋風建築である。晩年、福沢はこの演説館について「其規模こそ小なれ、日本開闢以来最第一着の建築、国民の記憶に存すべきものにして、幸に無事に保存するを得ば、後五百年、一種の古跡として見物する人もある可し」と記している¹⁷⁾。

5. むすび

漱石、鷗外らとともに「明治青年の第二世代」の一人として評価され、日本の近代化に大きく貢献した円了だが、福沢に劣らぬ業績を残しながら、知名度という点では遠く及ばない¹⁸⁾。一般に円了はキリスト教を排撃した国粹主義者といったレッテルを貼られ一面的な評価しか受けてこなかった。

一方、福沢は戦後（丸山真男など）いわゆる進歩的知識人の崇拜するところとなり、いわば自由主義、民主主義の権化として研究されてきた。一般的な話題に取り上げられることも多く、一万円札の肖像画や記念切手に採用されるなどポピュラーな存在となっていた。片や円了は「妖怪博士」としては知られていたが¹⁹⁾、国粹主義的な一面が誤解され、敬遠された嫌いがある。

以上、本論は明治の思想家・教育者として顕著な業績を残した井上円了と福沢諭吉の生涯・業績、人柄及びその研究組織・体制を比較した（付表参照）。それにより新たな円了像の構築を試みたが、当初意図した人物像の明快な抽出には至らなかった²⁰⁾。とりわけ二人の知名度の差異が何に因るものか明らかにできなかった。今後の課題としたい。

[注]

- 1) 菊池（2013）50 ページ、参照。
- 2) 都倉（2017）参照。
- 3) 福沢も円了も洋学により自然科学系の学問を学び、物事・事象を科学的・合理的に考える、換言すれば、数量的、計量的に整理・分析する能力に長けていた。宮川（2018）参照。
- 4) 本稿は堀（2018）をベースにこれを大幅に加筆・修正したものである。
- 5) 以上、三浦（2014）109 ページ、三浦（2016）17～20 ページ、参照。
- 6) <http://www.toyo.ac.jp/site/enryo/enryo-outline.html>（2018/07/23）参照。
- 7) 井上円了の学術的研究の基盤、定本となる（決定版）全集の発行がぜひとも望まれる。
- 8) 福沢のいう「学問」（後述）とは「知性の活用」を意味する（小浜 [2018] 23 ページ、参照。）。これは円了のいう「哲学」と同義と考えてよい。
- 9) 小泉信三「福沢諭吉の歴史観－『民情一新』と旧藩情」市村（2017）109～110 ページ、参照。
- 10) 円了、福沢ともにベストセラー作家だった。円了は学生（東京大学）時代から若き論客として名を馳せた。『真理金針』『仏教活論序論』などのベストセラーがある。これらの著作によって円了の名は思想・宗教界で一躍有名となった。これとは別に『漫遊記』と題する自筆の旅行記と自作の漢詩集がある。円了の著作はあまりに膨大なため未だ十分な整理がなされていない。
- 11) 小浜（2018）201～206 ページ、参照。
- 12) 福沢については福沢・会田（1970）、円了については三浦（2014）（2016）を主として参考にした。
- 13) 巡講の講演回数は約 5,300 回、聴衆動員数は 130 万人、旅行日数は（少なくとも）3,578 日だった。
- 14) 堀（2016）参照。
- 15) 円了の著作は非常におもしろいが女性についての言及が極めて少ないとの指摘がある。平野（1974）347 ページ、参照。

- 16) この詳細については出野（2017）、三浦（2017）参照。
- 17) <https://bunkaisan.exblog.jp/15276306/>（2018/07/30）参照。
- 18) 代表的な高校の日本史教科書『高校日本史 B』（山川出版社）では福沢は4件（『学問のすゝめ』著者、私学慶應義塾の設立、脱亜論主張、適塾出身）取り上げられているが円了については1件もない。ただ『日本史用語集』（山川出版社）には以下のような記述がある。「井上円了：仏教思想家。哲学館（東洋大学の前身）を設立。政教社創立にも参加。国粹主義の立場からキリスト教に反対し、仏教の体系化に努めた。」
- 19) 古生物学者の視点からみた井上円了の妖怪研究については荻野（2018）が参考になる。「井上円了（1858～1919年）は東洋大学を創った哲学者だが、お化けを学問とした『お化けの先生』としてよく知られている。」荻野（2018）38～39ページ、引用。
- 20) 今村（2018）は東洋大学国際学部グローバル・イノベーション学科の設立・教育理念を円了と福沢との比較から論じている。

[参考文献]

- 市村弘正編（2017）『論集 福沢諭吉』平凡社（平凡社ライブラリー）、2017年
- 出野尚紀（2017）「哲学堂の構想についての一考察」『国際井上円了学会第6回学術大会予稿集』国際井上円了学会、東洋大学白山キャンパス、2017年9月16日
- 今村肇（2018）「井上円了と福澤諭吉の目指したグローバル人材像とは 新学科 GINOS の Travel, Play, Dialogue 教育でその DNA を蘇らせる」『井上円了センター年報』第26号、東洋大学井上円了研究センター、2018年3月、326～362ページ
- 荻野慎諧（2018）『古生物学者、妖怪を掘る 鶴の正体、鬼の真実』NHK出版（NHK出版新書）、2018年
- 菊地章太（2013）『妖怪学の祖 井上円了』角川学芸出版（角川選書）、2013年
- 小浜逸郎（2018）『福沢諭吉 しなやかな日本精神』PHP研究所（PHP新書）、2018年
- 高木宏夫・三浦節夫（1987）『井上円了の教育理念』東洋大学、1987年
- 竹村牧男（2017）『井上円了 その哲学・思想』春秋社、2017年
- 都倉武之（2017）「創立者の理念をどう活かすか 慶應義塾における『福沢研究』と『塾史研究』の視座」東洋大学井上円了研究センター2017年度第2回公開研究会、2017年7月22日、東洋大学白山キャンパス
- 中島敬介（2017）「『戦争哲学一斑』に見る、井上円了の日本（人）倫理観」『国際井上円了学会第6回学術大会予稿集』国際井上円了学会、2017年
- 平野威馬雄（1974）『伝円了』草風社、1974年
- 平山洋（2008）『福沢諭吉－文明の政治には六つの要訣あり－』ミネルヴァ書房、2008年
- 福沢諭吉著・会田倉吉校注（1970）『福翁自伝』旺文社（旺文社文庫）、1970年
- 福沢諭吉（2002）『福沢諭吉著作集』全12巻、慶應義塾大学出版会、2002年
- 堀雅通（2016）「井上円了著『漫遊記』にみる井上円了の観光行動について」『大学院紀要』第52集、東洋大学大学院国際地域学研究所、2016年3月、61～90ページ
- 堀雅通（2018）「福沢諭吉と井上円了」『国際井上円了学会第7回学術大会予稿集』国際井上円了学会、東洋大学白山キャンパス、2018年9月15日、1～9ページ
- 三浦節夫（2014）『新潟県人物小伝 井上円了』新潟日報事業社、2014年
- 三浦節夫（2016）『井上円了－日本近代の先駆者の生涯と思想』教育評論社、2016年
- 三浦節夫（2017）「現代版 井上円了『哲学堂案内』」『井上円了センター年報』Vol.25、東洋大学井上円了研究センター、2017年3月、149～192ページ
- 宮川公男（2018）「『統計学が最強』と気づいた福澤と大隈」『Wedge』ウェッジ、2018年6月、36～37ページ

付表：井上円了・福沢諭吉比較表

井上円了	比較事項	福沢諭吉
安政5年(1858)3月18日	生年月日	天保5年(1835)1月10日
越後国長岡藩浦村真宗大谷派慈光寺の長男として生まれる。地方農村ながら村民から一目置かれる寺の長男ということでおおらかな環境で育つ。	生家・生まれ	大坂中津藩蔵屋敷に下級武士の次男として生まれる。父、兄とも儒学者。「門閥制度は親の敵」(封建時代の身分制に敵愾心抱く)
寺の長男として宗門教育を受ける。石黒忠恵の漢学塾で学ぶ(10歳)。木村鈍叟に漢籍を学ぶ(11歳)。	幼少年時代	一歳で父亡くす。母子6人、藩地中津に帰る。12歳頃漢学を学びはじめ、たちまち上達する。
長岡洋学校で洋学を学ぶ(16歳)。京都東本願寺教師教校で英学を学ぶ(19歳)。東京大学予備門・東京大学で学び、哲学科を卒業(20~27歳)。	青年時代	蘭学を志し長崎へ(19歳)。大坂に出て緒方洪庵の適塾に学び塾長となる(20~22歳)。江戸に出て蘭学の家塾(慶應義塾起源)を開く(23歳)。
大学時代に哲学を学び、生涯哲学の伝道を志す。	転機	横浜見物を機に蘭学から英学に転向(を決意)
自筆の漢詩集、旅行記『漫遊記』(19~27歳)、東大在学中から著述活動を展開、膨大な著作を残す。ベストセラー作家。哲学書院設立	著述活動	『増訂華英通語』(25歳)、『西洋事情』(31歳)、『学問のすすめ』(37歳)、『文明論之概略』(40歳)他、多くの著作をなす。ベストセラー作家
仏教を「東洋哲学」と見直し、近代化へ導く。日本主義者(ナショナリスト)	思想家	洋書の読解を通して日本の進むべき方向性を示す。脱亜論(ナショナリスト)
「哲学」を重視。「哲学」の伝道を志す。大学長、校長、修身教科書調査委員、高等教育会議議員	教育者	「数理学」(科学)と「独立心」の重要性説く。「実学」(科学)を重視
哲学館創立。「独立自活」(建学の精神)	私学の創設	慶應義塾創立。「独立自尊」(建学の精神)
政教社創設に参加。同機関誌『日本人』に寄稿	結社参画等	明六社結成に参加、交詢社設立
政治には関心を示さなかったが、富国強兵・殖産興業策を支持し、独自に観光立国論を唱えた。日清・日露戦争の勝利を喜ぶ。哲学館事件で懊悩	政治	政治活動とは一線画す。「明治14年の政変」で政府の嫌疑を受ける(46歳)。『時事新報』創刊(47歳)。日清戦争の献金運動起こし、1万円献金(59歳)
一時、神経症を患うも健康。脳溢血で死去(61歳)	健康	二度大病患うが健康。脳出血で死去(66歳)
酒嗜む。女性についての言及少ないとの指摘あり	酒と女性	酒癖。女性に潔癖。一生涯、妻・錦を連れ添う。
三回の海外視察旅行。「巡講」で全国を講演旅行	旅行	三度の渡航体経験。晩年、家族を伴い西日本を旅行
哲学堂に四聖祀り、精神修養の場とし、公園化	独自の建築	三田演説会発会し、三田演説館開館(40歳)
東洋大学井上円了研究センター。選集25巻	創設者研究	慶應義塾福澤研究センター。全集21巻・別巻1
妖怪研究では比較的知られるが、一般の知名度は低い。高校日本史教科書に記載なし。	知名度	抜群の知名度。紙幣及び記念切手肖像。著名人の研究者多い。高校日本史教科書に4件の記載あり。
辞退。官途に就かず。「心を残して、名を残さず」	栄典・叙勲	全て拒絶、官途に就かず。東京学士院会初代会長
慈光寺がつぶれても円了の事業を支えると言い続けた母・イクがいた。文学博士。晩年髭生やす。	その他	母子家庭で育つが、気骨ある母・順がいた。東京府会議員・副議長に選出されるが、辞退(46歳)

出所：筆者作成